2024年9月1日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神の目で自分を見る

［創世記37章18～27節］

兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ、相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えばよい。あれの夢がどうなるか、見てやろう。」ルベンはこれを聞いて、ヨセフを彼らの手から助け出そうとして、言った。「命まで取るのはよそう。」ルベンは続けて言った。「血を流してはならない。荒れ野のこの穴に投げ入れよう。手を下してはならない。」ルベンは、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったのである。ヨセフがやって来ると、兄たちはヨセフが着ていた着物、裾の長い晴れ着をはぎ取り、彼を捕らえて、穴に投げ込んだ。その穴は空で水はなかった。彼らはそれから、腰を下ろして食事を始めたが、ふと目を上げると、イシュマエル人の隊商がギレアドの方からやって来るのが見えた。らくだに樹脂、乳香、没薬を積んで、エジプトに下って行こうとしているところであった。ユダは兄弟たちに言った。「弟を殺して、その血を覆っても、何の得にもならない。 れより、あのイシュマエル人に売ろうではないか。弟に手をかけるのはよそう。あれだって、肉親の弟だから。」兄弟たちは、これを聞き入れた。

[1] 「俯瞰的」、「鳥瞰的」な眼差し

少し前に、或る水中カメラマンの写真展に行きました。沖縄が多いのですが、日本中の海や、或いは海外、エジプトの海などに潜り、陸の上では見られないそこに生きる魚たちや生き物を撮影している写真などを見て、その海に入り込んでくる太陽の微妙な光も混ざり合って、本当に、息を飲むという感じがしました。そして思いました。例えば珊瑚礁の間を戯れているような魚たちは、自分たちがまさか写真を撮られているなんて思っていないな、と思って、このように魚たちを今見ることが出来る、というのは、神様の眼を与えられて見ているようなものだな、と思ったのです。水中写真は海の中ですけれども、それとは逆に、例えば飛行機の上から雲海を見たり、富士山を見たり、町々村々を見たりする時も、ああ、これもまるで神様の眼を与えられているようなものかもしれない、と思うことがあります。よく「俯瞰的」とか「鳥瞰的」と言うこともありますよね。近視眼的になるのではなく、自分が鳥のようになって、高い場所から眺めること。

　私は、人生にもそんな「俯瞰的」、「鳥瞰的」な眼差しを自分が持ち、自分の人生を、ある意味余裕を持って捉えるということは大事なことかもしれないなと思ったのです。それは、これからご一緒に読むことになる、創世記37章以下の「ヨセフ物語」を改めて読む中で、そう思ったのです。

[2] ヨセフの数奇な人生の始まり

よくヨセフは、欠点のない人物だと言われます。清廉潔白な人物と言いますか。そうではない人物が聖書の登場人物にはとても多い（！）ですから、その意味では傑出しているとも言えます。しかし、彼は苦労しなかった人ではありません。むしろ、人一倍苦労して、数奇な人生を送らざるを得なくなった人です。

　今日は37章の途中から読んで頂きましたが、まずその全体を見ておきたいと思います。ヨセフは、先週まで見てきましたヤコブ（イスラエル）の息子です。ヤコブには二人の妻と二人の側女（そばめ）がいましたが、子供は妻レアとの間に6人、二人の側女の間に4人、そして最も愛していたラケルとの間にはなかなか子供は与えられなかったのですが、ヤコブが年老いてから、ヨセフとベニヤミンという2人の子どもが生まれました。計12人の子供たち、それが後の「イスラエル12部族」になってゆきます。ヨセフは、ヤコブの11番目の子です。10人の兄たちがいるのです。

ヨセフ17才の時です。創世記37:3にはこう書いてあります。―「イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった」。―あれっ？って思いますね。ヤコブの依怙贔屓です。彼自身、母リベカから偏愛された経験を持ち、それで大変な人生を送った訳ですが、今度は彼自身が年寄り子のヨセフを特に愛したのです。晴れ着まで作って着せていた。兄たちが面白くないですよね。しかも、ヨセフはこの後のことを見ると、あまりに無邪気過ぎました。ある時「夢」を見たのです（二つの夢）が、そのどちらもが、兄たちや親が、ヨセフの前に恭しくひれ伏すという幻だったと兄たちを前にして言うのです。ヨセフ自身は悪気は無かったと思うのですが、この様なことを言われた者がどういう気持ちになるか、また、今それを言うことなのかそれを想像する力がないということなのでしょう。ある牧師は言いました。「ヨセフはそのような自分では気が付かない生きづらさを持っていた」と。きっとそうだったのだと思います。いわゆる‟空気が読めない”ということ。それ自体は、悪い事とは言えませんね。ある意味、周囲が受け入れるべきことでしょう。

しかし、このような無邪気な出来事が、物事を悲劇に向かわせます。37:12節以下を是非お読み下さい。その小見出しに「ヨセフ、エジプトに売られる」とあります。先ほど読んで頂いた所、18節にこうあります。―「兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ、相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えばよい。あれの夢がどうなるか、見てやろう」。兄弟たちは、こんな弟は目障りだと思い、殺すことさえ考えていた訳です。これはひどい。しかしその計画は、兄ルベンの「命まで取るのはよそう」という言葉によって、穴に落とされたヨセフはその後、そこに通りがかった外国の商人に売り飛ばすのです。兄の一人ユダはこう言いましたね。28節。「弟を殺して、その血を覆っても、何の得にもならない。それより、あのイシュマエル人に売ろうではないか。弟に手をかけるのはよそう。あれだって、肉親の弟だから」。―かくして、ヨセフは銀20枚（子供の奴隷の値段。現代では数万円程度）という安い価値で売られてしまいました。（ちなみに、主イエス様は、ユダに銀30枚＝大人の奴隷の値＝で引き渡された形になりましたが、ヨセフが、しばしばイエス様のひな型とも言われることがありますが、こういう点も含めてだと思います）。

　この後、兄たちは、弟ヨセフは獣の餌食になってしまったと、剝ぎ取ったヨセフの着物を拾い上げ、家畜の血に浸して、父ヤコブに渡します。ヤコブは泣いて嘆きます。もう、皆が不幸な目に遭っていますね。歯車が悪い方に全部回転していくかのようです。そのような不幸な出来事が起こる時、私たちは考えると思います。“誰が悪い、何がこれをもたらした？”と。…色々なことが言えるでしょう。それぞれ悪い部分があるでしょう。しかし、犯人捜しをして、一時は良いかもしれませんが、却って空しい気持ちが残るだけではないでしょうか？そしてそれは恐いことですね。誰かに原因を帰してしまう。叩いて安心する。しかし、多くの場合、物事は単純ではなく、色々な事柄が多層的に絡み合ったりして、物事がいつしか悪い方向に進んで行ってしまうことは多いと思います。誰かを生贄の小羊のようにして裁いても、本当の解決は無いのではないでしょうか？

[3] このお方の眼の中にいつも置かれているから

今月はずっと「ヨセフ物語」を読み進めて参ります。難しい話ではありません。どこか軽い小説を読むように、気軽に読んでしまうことが私もあるように思います。しかし、これは決して軽い話ではないのではないかと思いました。むしろ私たちの人生の縮図があるのではないかと。

売られて行ったヨセフはこの後どうなったのでしょうか。ドラマの予告編のようなことが37:36 に記されています。―「一方、メダンの人たちがエジプトへ売ったヨセフは、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルのものとなった」。ヨセフは、売られた先で、何と、エジプト政府の役人に仕える立場となったのです。その後も、計画していないことが次々起こります。自分の思いを超えたことが起こるのです、私たちの人生にも。

ヨセフ自身、他人や人生を恨んで生きることも出来た訳です。人生が「勝ち負け」だとしたら、俺の人生終わったな、と言って絶望することもあり得た訳です。しかし、これからのヨセフ物語を読んでみると、彼の口から恨みやつらみは聞こえてきませんね、全然。一つには、彼の、深刻にならない無邪気さが幸いしたのかなということも言えるかもしれませんね。しかし、それ以上にと言っていいと思うことがあります。ヨセフはきっと、自分自身を神様にお委ねしていたと思います。自分の人生を、それこそ俯瞰的・鳥瞰的にとらえる事が出来る人だったのではないかな、と思います。後の方で、兄たちと和解する場面があるのですが、その時ヨセフはこのように兄たちに語っています。45：4以下です。「兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです」。先のヤコブ物語の様には、直接神様がヨセフに姿を現すことはなのですけれども（その意味では今の私たちと同じです）、彼は、自分自身を片時も見離さず、共にいて下さるお方の眼の中にいつも置かれている、ということを信じて生きている人だったのではないでしょうか。

この後、ご一緒に歌いたい讃美歌は「わが魂を愛するイエス」と言う歌ですが、これは、私たちの魂はどのような中にあっても神様の眼差し、又主イエスの慈しみの愛の中にいつも捉えられているということを歌っていると思います。自分自身を「自分」や「他者」という歪んだ物差しで測るのではなく、そして人生に絶望するのではなく、ヨセフのように、大胆に、神様に見つめられ、十字架の主の愛に捉えられている自分自身を愛して行きたいと思います。

　最後に、小島誠司という牧師が書かれた『聖句断想』からの言葉を一つお読みしてお祈り致します。

*「神のなされることは皆その時にかなって美しい」（伝道の書3:11）。 「人生不可解。そう言って自死した青年が居ました。人生は複雑であり、混乱しており、人は無意味に苦しんでいるように見えます。しかし忘れてはなりません。わたしたちは神の織りなす刺しゅうの裏側を見ているだけなのです。表にはたえまなく美しい刺しゅうが刻まれています。この表をわたしたちはいつか、見せていただくときが来ます。そのとき、耐え忍んで良かった、ときっと思うのであります。」*

愛する神様、自分中心にしか人生を見ることが出来ない私たちを、神様の愛の眼差しの中に置かれている私であることを信じて生きることが出来ますように。あなたは、私たちの創造者です。そして、救い主ですから、私たちがあなたの許に帰っていくことで本当の平安と何も恐れない自由を与えられることを信じます。主よ、この私を捉えて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。